

エレミヤ書38章14-15節 「御言葉を聞いても、聞かない人」

1A 御言葉への興味 14

1B 御心を知る願い

2B 秘かな思い

2A 語るのをためらう預言者 15

1B 行なわない罪

2B 取り組まない罪

3B 預言者への迫害

3A 実行しない心

1B 聞くことへの熱心

2B 人への恐れ

3B 臆病

本文

エレミヤ書 38 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、エレミヤ書の 36 章まで来ています。午後には 37 章から 39 章までを読んでいきたいと思えます。今朝は、38 章 14-15 節に注目していきます。

14 ゼデキヤ王は人をやって、預言者エレミヤを自分のところ、主の宮の第三の入口に召し寄せた。王がエレミヤに、「私はあなたに一言尋ねる。私に何事も隠してはならない。」と言うと、15 エレミヤはゼデキヤに言った。「もし私があなたに告げれば、あなたは必ず、私を殺すではありませんか。私があなたに忠告しても、あなたは私の言うことを聞きません。」

私たちが今日学ぶ 37 章から 39 章は、ゼデキヤ王についての話です。エルサレムがバビロンに包囲されていて、それでゼデキヤも人々も、主の言葉に聞き従わなかったので、町に火を付けられ、エルサレムは破壊され、捕え移されています。37 章 2 節に、この三章の結論が書かれています。「彼も、その家来たちも、一般の民衆も、預言者エレミヤによって語られた主のことばに聞き従わなかった。」とあります。

1A 御言葉への興味 14

けれども、ゼデキヤという人物は興味深いです。聞き従わないでいるのに、人一倍、エレミヤの言葉を聞きたい人だったのです。この前はエホヤキムが、巻き物を暖炉の火に燃やしてしまったところを読みましたが、ゼデキヤは全く違います。彼はエレミヤを呼び寄せて、主が何を語っているかを尋ねています。37 章 3 節には、「どうか、私たちのために、私たちの神、主に、祈ってください。」とも言っています。37 章 17 節には、「王はひそかに自分の家でひそかに彼に尋ねて言った。」

『主から、みことばがあったか。』』とあります。そして今、「**私に何事も隠してはならない。**」と言っているのです。これだけエレミヤの語る神の言葉に、興味をもって、情熱をもって聞きたいと思っているのに、彼はその言葉に聞き従うことはしなかったのです。「聞いているのに、聞いていない。」という問題を持っていました。

1B 御心を知る願い

聖書は世界のベストセラーですね。日本でもそれは、例外ではありません。日本には、クリスチヤンの数は1%以下と言われていますが、聖書を知りたいという人々はかなり多いと聞きます。それで、聖書を知るための本はよく売れていますし、実に、私たちの聖書通読の学び、ロゴス・ミニストリーの聖書の学びの部分は、グーグルの検索で一番上に出できます。つまり、聖書を知りたいと願っている人たちは数多くいます。

けれども、聖書を知りたいと願っていることと、神ご自身を個人的に、人格的に知りたいというのは必ずしも合致しません。いや、聖書を知っていく欲求は絶え間なく出てきても、聖書自体がそれを許しません。それは、聖書が、神を知ること、イエス・キリストを知ることが、永遠の命であると言っているからです。「ヨハネ 17:3 その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。」聖書は、前回学んだように、教えだけでなく、戒め、矯正、義の訓練のために有益です。自分が取り扱われます。自分を保っておいて、それで聖書を読み続けることはできません。「ここには、触れないでほしい」という自分の部分を主は、聖書によって明らかにされます。そして、その部分を主に明け渡して、主に支配していただき、清めていただきます。結局、聖書はどこを読んでも神の救いのご計画と引き離すことはできません。ですから、結局、キリストの十字架の前に自分が来ることとなります。そして、自分が変えられることが求められます。

けれども、他の目的があって聖書を知りたいという欲求があります。聖書にどんな話があるのだろう知りたい、何でも良いのですが、それらは良いきっかけにはなるでしょう。少し文学的な興味から聖書に近づいている人もいることでしょう。けれども、どこかでぶつかります。自分の欲求と、神の言葉との間に衝突が起こります。それが、ゼデキヤが通ったところでした。彼は、エレミヤが主の言葉を聞くのには、並々ならぬ関心と情熱がありましたが、自分自身というものを、しっかり持ってしまっていたのです。

同じような問題を持っている人が聖書にはいます。例えば、ヘロデ・アンティパスです。ヘロデは、預言者の言葉を聞くのは大好きでした。「マルコ 6:20 それはヘロデが、ヨハネを正しい聖なる人と知って、彼を恐れ、保護を加えていたからである。また、ヘロデはヨハネの教えを聞くとき、非常に当惑しながらも、喜んで耳を傾けていた。」ヘロデはバプテスマのヨハネを、自分の妻ヘロデヤの手から保護していました。なぜなら、ヨハネが聖なる正しい人であることを知っていたから、手を出してはいけないと思っていたからです。そして、「非常に当惑しながらも、喜んで耳を傾けていた。」

と言っています。けれども、彼が結局、ヨハネを殺すことになります。ヘロデヤが娘サロメに、ヨハネの首を持ってくるように言いつけたからです。神の言葉を聞きたいと願いながら、そして神の預言者を守りたいと願いながら、自分の行ないは改められないので、結局、預言者を殺しているのです。

2B 秘かな思い

ところで、ゼデキヤ王は、預言者エレミヤを「**主の宮の第三の入口に召し寄せた。**」と言っています。第三と言っていますが、第一の入口は一般の民が入るところでしょう。そして第二の入口は祭司たちの出入りする所です。けれども、王宮から直接、神殿に行くことのできる、私的な通路があったのでしょうか。そこにエレミヤを召し寄せました。なぜかと言えば、人に知られたくないからです。自分自身が、エレミヤの預言に興味があるということが知れたら、自分の取り巻きは、エレミヤの預言を憎み、彼を迫害していたのですから、大変なことになります。ですから、秘かに彼の語る主の言葉を聞きに来たのです。

先ほど話しましたように、日本人でクリスチャンになる人はとても少ないですが、聖書を知りたいというのはかなりの割合になるのではないかと思います。これは、人々の心の奥深くに、聖書だけは他の書物とは何か違うという、畏敬の念のようなものを多少なりとも感じているのではないのでしょうか？しかし、そこに書かれてあることを自分の生活に取り入れることは考えられません。考えようとするならば、いろいろ乗り越えなければいけない障害があります。その一つが、「人にどう思われるか？」であります。他の人々にどう思われるか分からない、ということです。そこに書かれていることは、今、自分の置かれている生活空間には異質なものであり、その異質なものを取り入れてしまうものなら、大変なことになるという恐れがあります。

2A 語るのをためらう預言者 15

このように、ゼデキヤは隠さないで、主の語られることを語ってほしいと願っていますが、エレミヤがためらっています。「**もし私があなたに告げれば、あなたは必ず、私を殺すではありませんか。**」

1B 行なわない罪

エレミヤは既に殺されかけていました。彼は既に、一度、牢屋に入れられています。彼の預言を聞いて、首長たちは激しく怒っていました。そして、エレミヤを打ち叩き、牢屋に入れていました。そしてゼデキヤ王は、牢屋からエレミヤを出し、秘かに自分の家に連れてきて、「主から、みことばがあったか。」と尋ねました(37:17)。エレミヤは、はっきりと、「あなたはバビロンの王の手に渡されます。」と言って、「あなたや、あなたの家来たちや、この民に、私が何の罪を犯したというので、私を獄屋に入れたのですか。(37:18)」と問い質しています。そうです、首長たちは彼の家来です。彼の家来であれば、ゼデキヤは不当な仕打ちをやめさせなければいけないし、やめさせることのできる力を持っています。けれども、それを行なわなかったのです。ゼデキヤは、「行なわないこと

によって、悪を行っていた。」と言えるのです。ヤコブの手紙 4 章 17 節に、「なすべき正しいことを知っていながら行なわないなら、それはその人の罪です。」とあります。

ゼデキヤの行なわない罪は、これだけに終わりませんでした。次に首長たちが王に、「38:4 どうぞ、あの男を殺してください。彼はこのように、こんなことばをみなに語り、この町に残っている戦士や、民全体の士気をくじいているからです。あの男は、この民のために平安を求めず、かえってわざわいを求めているからです。」と言ってきました。それで王は、「今、彼はあなたがたの手の中にある。王は、あなたがたに逆らっては何もできない。(38:5)」と答えたのです。これでエレミヤは、穴の中に投げ込まれました。下は泥になっていたので、彼は泥の中に沈んでいきました。勇気を出して、宦官エベデ・メレクが、ここまではエレミヤが死んでしまうと王に訴えたので、それで、王は彼に命じて、穴から引きだしなさいと言ったのです。そして、エレミヤが今、第三の入口にまで連れて来られているのですから、エレミヤが、「あなたは必ず、私を殺す」と言って無理がないのです。

ゼデキヤは、家来に言われたことをそのまま行なっていく人間でした。しかしゼデキヤには、神に対して説明責任があります。彼は神の前に出て、神を恐れて、主に命じられたことを行なわなければいけなかったのです。公義と正義を行なわなければいけなかったのです。誰かに言われているから、そのままを行なっていくということは、私たちの内にないでしょうか？

2B 取り組まない罪

そしてゼデキヤではなく、首長たちの思いを考えてみたいと思います。なぜエレミヤの言葉に対して怒り狂っているのか？を見たいと思います。エレミヤは、エルサレムに取り囲まれている中で、バビロンに投降すれば命は助かる。そして、この町で抵抗をしていけば、剣と飢饉と疫病が待っていると預言していました。このことに対して、「この町に残っている戦士や、民全体の士気をくじいている」と首長たちは王に訴えました。それから、「この民のために平安を求めず、かえってわざわいを求めている」とも言っています。

彼らの言っていることは、その深い事情を知らなければ、尤もに聞こえるのです。皆でエルサレムが倒れないように、何とかして頑張っているのに、投降しろとは何なのか？また、平安を宣べ伝えるのが預言者の働きであり、災いを語るとは何事か！ということになります。しかし、それは表面的な見方なのです。彼らは政治的に、常識的に物事を考えていましたが、エレミヤは霊的な知恵を与えていました。それは、彼らが主の御声に聞き従ってこなかったということです。主に目を背け、偶像を拝み、貧しい人を顧みなかったこと。主に聞き従うことを行なっていないので、主は彼らを平安の内に守っておられたのですが、その守りを少しずつ取り除かれていったのです。そして今、バビロンがエルサレムを攻めるままにされます。

私たち人間は、とても単純に神の御心を判断しています。戦争のないことが御心であり、戦争があるのは御心ではない。病気がないことが御心であり、病気のあることは御心に反する。もちろん

ん戦争は、人が争う心から来るもので、罪の結果です。病気も、アダムが罪を犯したので入り込んだものであり、罪の結果です。けれども、戦争がないからといって私たちは神に喜ばれていることを行なっている訳ではなく、むしろ平和な時に罪を犯し続けています。神は、そうした人の罪から来た悪いもの、災いでさえ、私たちが神に立ち返るために用いられることがあります。ですから、私たちは、主の前にへりくだらないといけません。これが、エレミヤの時代にユダの民が見えていなかったことでした。彼らは政治的に、物理的に、目で見える所で善悪を判断していましたが、これは霊的な問題だったのです。

3B 預言者への迫害

そして彼らは、エレミヤを穴の中に投げ込みました。これは、いつもそうですが、人々は神に背いている時に、神の言葉を語る預言者を迫害します。預言者は、自分が嫌われているのではなく、自分の語っている神を人々が嫌い、憎んでいるので、その矛先が預言者に向かうのです。イエス様は弟子たちに、「ヨハネ 15:18 もし世があなたがたを憎むなら、世はあなたがたよりもわたしを先に憎んだことを知っておきなさい。」主が私たちを選び、ご自分のものとしたら、私たちはキリストの体の一部になっています。ですから、私たちに対して向けられるものは、すなわちキリストご自身、神ご自身に向けられているものであります。私たちはどうしても、エレミヤ自身そうでしたが、人々が拒むのであれば、落胆します。怖気づいてします。また、自分が何か悪いことをしたのではないかと思ひ込みます。しかし、そうではありません。主の言葉を語る時、また主に仕えている時に、主に対して人々がしていることを、目の当たりにしているだけです。

3A 実行しない心

話をゼデキヤに戻しますと、エレミヤがゼデキヤに、「**私**があなたに忠告しても、あなたは私の言うことを聞きません。」と言っています。忠告しても、聞かないという問題です。ヤコブは手紙の中で、「みことばを実行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であってははいけません。(1:22)」と言いました。聞いても行なわないのです。

1B 聞くことへの熱心

ゼデキヤは、興味深いことに、「言うことを聞かない」というエレミヤの言葉には答えないで、「**私**を殺すではありませんか。」との言葉に強く反応しています。16 節で、「私は決してあなたを殺さない。また、あなたのいのちをねらうあの人々の手に、あなたを渡すことも絶対にしない。」と言っていますね。エレミヤが主の言葉を語ることは聞くし、主の預言者を守ることについては心を変えて、守ることにしたようです。そこまで預言者を守りたいのに、肝心の、主の言葉そのものは従おうとしません。聞くことに熱心で強く「アーメン」と言っても、その人の行ないに、その人が本当に聞いているのか、聞いていないのかが明らかに現れます。

けれども、なぜそのように行ないに現れないのでしょうか？ イエス様は、この問題を初めから知っておられて、それで説教の終わりに次のように呼びかけを行なわれました。ルカ 6 章の 46-

49 節です。「なぜ、わたしを『主よ、主よ。』と呼びながら、わたしの言うことを行なわないのですか。わたしのもとに来て、わたしのことばを聞き、それを行なう人たちがどんな人に似ているか、あなたがたに示しましょう。その人は、地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて、それから家を建てた人に似ています。洪水になり、川の水がその家に押し寄せたときも、しっかり建てられていたから、びくともしませんでした。聞いても実行しない人は、土台なしで地面に家を建てた人に似ています。川の水が押し寄せると、家は一ぺんに倒れてしまい、そのこわれ方はひどいものとなりました。」

イエス様ははっきりと、聞いているけれども行ないに現れない問題が、「地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて」いないところから出てくることを教えておられます。家を建てる時に、岩盤まで掘り下げて杭を打つからこそ、洪水が来ても押し流されることがありません。ある方は、この箇所について次のように言われました。「私たちは「聞いて行う」ということばを聞いて、「行う」という所に心がとまりやすいのですが、それを支えているものが、神との深い交わりであることに気づかないことが多いのです。このところは見えない部分であり、実に神秘的な領域です。¹」私たちは、自分が行なえていないということを憂える場合があります。けれども、それは表面的な自己分析です。行なえていないものが問題なのではなく、神を、自分の心の中に深いところまでお迎えしていないことが問題なのです。御言葉を聞いているけれども、自分をしっかり保ったままで聞いています。その自分を主の前に明け渡すことをしていれば、主の深い憐れみに応答して、そのまま行なうことができます。

2B 人への恐れ

ゼデキヤが主の言葉に不従順であった具体的な問題は、人を恐れていることでした。なぜ、聞き従えないか理由を打ち明けています。19 節で、「私は、カルデヤ人に投降したユダヤ人たちを恐れる。カルデヤ人が私を彼らの手に渡し、彼らが私をなぶりものにするかもしれない。」と言っています。こうやって恐れていたのが、主が命じることができないのです。

人を恐れていることと、人のことを気にしていることは、聖霊が働かず、それゆえに主に言われていることに従えないことは、密接に結びついています。イエス様は弟子たちに、「人間たちを恐れてはいけません。」と言われて、ご自身を人の前で証しすることを恐れてはいけないことを話されました。そして、語る時は、「言うべきことは、そのときに聖霊が教えてくださるからです。(ルカ 12:12)」と言われました。人ではなく、神を恐れて、神に仕える時に、その時に聖霊が働いてくださいます。ですから、もしゼデキヤのように、状況に合わせて動いていく。人を恐れて、人に言うことを気にして、それに合わせていだけであれば、聖霊はそこにはおられません。そして聖霊がおられないのであれば、主の言われることに従えるはずがありません。ここで、「聞いているのに、聞き従えない」という問題が起こるのです。

¹<http://meigatabokushin.secret.jp/index.php?%E8%87%AA%E5%88%86%E8%87%AA%E8%BA%AB%E3%82%92%E5%90%9F%E5%91%B3%E3%81%9B%E3%82%88>

「恐れ」というのは、私たちの敵です。これは、根本的に神に信頼することを阻む原因となっています。使徒ヨハネは言いました。「1ヨハネ 4:18 愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。なぜなら恐れには刑罰が伴っているからです。恐れる者の愛は、全きものとなっていないのです。」神は愛です。そして、その愛を信頼して神に近づけば、そこには恐れがありません。

3B 臆病

したがって、人を恐れたり、状況に合わせて動くことによって、神の言われていることに従えないという問題は根本的には、「神を信頼しない」という問題であります。恐れて、神のところにならなくて退いてしまう、という問題です。「ヘブル 10:38-39 わたしの義人は信仰によって生きる。もし、恐れ退くなら、わたしのところは彼を喜ばない。」私たちは、恐れ退いて滅びる者ではなく、信じていのちを保つ者です。」恐れには、自分の守っている分野があります。自分が支配して、自分が守って、自分で隠すという分野があります。それを、言い方を変えるなら、「高慢」です。自我と言ってもよいでしょう、自分というものにしがみついて、それを明らかにすることを拒む頑なさです。その自分を失うことを恐れているので、自分を失えば命を得ると言われたイエス様の約束の通りにならないのです。そして、こうした者は恐れて滅んでしまうと、今、ヘブル書で読みました。第二の死の中にも、初めに出てくるのは、「臆病者」であります。「黙示 21:8 しかし、おくびょう者、不信仰の者、憎むべき者、人を殺す者、不品行の者、魔術を行なう者、偶像を拝む者、すべて偽りを言う者どもの受ける分は、火と硫黄との燃える池の中にある。これが第二の死である。」

主は愛しておられます。そのままの貴方で愛しておられます。何かをしなればいけない、という恐れを抱かないでください。その何もできない、いや、自分のどうしようもない姿のままで、主は受け入れておられます。なぜなら、主はご自分の体に全てのあなたの罪、その傷を負っておられるからです。主は、ですからそのままのあなたを受け入れたいと願われています。そして、その傷を癒したいと願われています。そこが御言葉を行なう源泉です。聞いて、そのまま従うことのできる源泉です。全き愛によって、恐れが締め出されていれば、神を愛する愛のゆえに、命令を守り行なっている自分に気づくはずです。